

1918年のソヴィエト農村-3-

| | |
|-----|---|
| 著者 | 梶川 伸一 |
| 雑誌名 | 名城大学人文紀要 |
| 巻 | 27 |
| 号 | 1 |
| ページ | 20-44 |
| 発行年 | 1991-12-01 |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/9981 |

1918年のソヴィエト農村（その3）

梶 川 伸 一

第三章 食糧部隊の編成と活動

都市労働者からなる食糧部隊こそが穀物調達の実行機関であった。そして18年のソヴィエト農村では都市プロレタリア＝食糧部隊が農村に出向くにつれ、労働者と農民との緊張関係が昂進された。このような食糧部隊はどのように編成され、どのような活動をしたのか。またあるソヴィエト内戦期史家は、18年春～夏に都市の食糧部隊により農村に人為的分裂が持ち込まれたと主張するが、⁽¹⁾これは何を意味するのか。食糧部隊が18年の農村で果たした役割を考察するのが本章の課題である。

(1) Кабанов В. В. Указ. статья, с. 32.

1) クラークとの戦争を

既に指摘したように、18年春のソヴィエト農村は混乱していた。しかしこの原因は飢餓だけではなかった。春の一時的土地分配も勤労農民にとって必ずしも満足すべき成果を残さなかった。幾つかの県では土地問題が非常に尖鋭化した。例えば、シムビルスク県から次のように伝えられた。シムビルスク土地委員会は3月までに全土地フォンドを分配すべしと決定して、「試験的 пробный」土地社会化を実施した。このため農村では地主屋敷地だけでなく、移住していたフートル地、国有地、地方自治体地、実験農場、養樹園、工場企業、製粉所さえ略奪され、略取され、持ち去られた。野蛮にも急いで森林、菜園が「根こそぎにされた покорчены」。農村には整然とした、意識の高いポリシェヴィキ組織はなかった。春の土地再分配の際に例外なく全員が土地を手に入れようとし、農村は二つのほぼ拮抗する敵対的グループに別れた。⁽¹⁾こうした厳しい農村内での対立の状況の中で春の農業カムパニアが行われた。そのうえ農村にはブラーグや馬鋤以上に帰還兵士が持ち帰った鉄砲や機関銃をはじめとする多くの武器が貯蔵されていた。農村では土地を耕作するより土地に関連する争い事が頻発した。富農と貧農、貧農と極貧農、現地農民と他所農民との間での闘争が18年農業カムパニアの主な中味であったとリャザン県リャザン郡の農村から伝えられた。⁽²⁾そしてこの時期、特に北部諸県で顕著に見られた穀物不足は春の播種を損なう恐れを、更には春の飢餓の恐れを生み出し、例えばノヴゴロド県

からは、食糧状態は危機的である、畑は播種されていないと報じられたような事態が農村での混乱に拍車をかけた。⁽³⁾

しかし中央政府の中には4月前半までは食糧問題に関してある種の楽観的気分が漲っていた。既に触れたことだが、穀物供給源としてこの時期にはシベリアとカフカースが期待できた。4月に開かれた北部州食糧参事会では「現在主要な穀倉は我々にとってシベリアである」とか、北部州ソヴィエトと食糧委員会の代表者会議では「シベリアとカフカースの貯蔵の完全な利用なしでは、大ロシアは死ぬ運命にある」と指摘された⁽⁴⁾これら穀物生産地帯からの北部諸県への穀物搬入は一定の増加をみせていた。3月12日に開かれたモスクワ・ソヴィエト幹部会会議でもモスクワ市食糧委員長 M. E. シューフレルは、我々は1カ月800輛の食糧貨物を必要とするが、17年10月までは1000輛を下らなかった食糧貨物が12月には300輛にまで低下した、しかし現在600 輛の穀物がモスクワに送られていると報告し、以前は13%しか遂行されなかった穀物遂行命令が現在は45%にまで上昇したと述べた。⁽⁵⁾

しかし4月が訪れ、厳しい食糧危機が再び始まろうとしていた。3月末にはペトログラードには20日分の食糧が残されていたが、徐々に食糧の搬入が減少し始めた。⁽⁶⁾4月下旬になるとロシア中央諸県で遅れて訪れた春の泥濘期によって駅への穀物の搬送が著しく妨げられた。地方ではペトログラード向けの穀物貨物が勝手な行き先変更と略奪を蒙っていた。4月27日モスクワで開かれた北部州食糧大会は悲劇的基調であった。ここで食糧問題に関してシューブ Шуб が次のように報告した。

「最近一連の飢餓一揆が北部州のあちこちで猖獗している。黒百人組は大衆を反ソヴィエト権力に向けるためにこれら一揆を利用している。それらは既に著しい規模に達しているので、現地的手段で鎮圧することは不可能である。

状況は恐ろしい。……我が運輸は解体された。あちこちで燃料が不足し、運行が停止している。食糧貨物は武装した農民匪賊によって盗まれている。貯蔵の状況も良くない。我が収穫は平年より低く、その1/7は刈取られてさえいない。我が主要な穀物貯蔵はウクライナにあるが、現在この穀物を当てにしているのではない。シベリアは異常な収穫である。だがシベリアとは我々是一本の鉄道で結ばれているだけで、これ故充分な量の穀物をそこから受け取ることはできない。カフカースにも著しい貯蔵がある。だがコルニーロフ軍が根絶されない限り、そこから食糧を受け取ることは不可能である」⁽⁸⁾

彼の悲観的見通しが不幸にも的中した。3月のシューフレルの楽観的期待に反し、4月の穀物命令の遂行は僅か3～4%でしかないことが明らかとなった。⁽⁹⁾ペトログラードでは穀物輸送の滞貨のために4月29日からパン配給が1日1/8フントにまで縮小された。⁽¹⁰⁾こうして飢餓はペトログラードでは益々深刻になり、「穀物は到着せず、飢餓のために過激行為が始まり、それは反革命暴動に転化する恐れがある」と言われるまでになり、⁽¹¹⁾5月11日にはレーニンとツルーパーの連名で全県ソヴィエトと食糧委に送られた「ペトログラードは異常な破滅状態にある」

1

との電報が公表された。⁽¹²⁾翌12日の官報には「穀物の受取の主要な障碍は農村ブルジョワジーである。富農は穀物の販売を必要としていない。我々は農村に武装部隊を派遣するであろうし、それらは武器で富農に穀物を販売させるであろうし、これは犠牲者と死にもの狂いの抵抗が出る戦争である」との内容のツェルーパーとの会見記事が掲載され、⁽¹³⁾その翌日の5月13日に所謂食糧独裁令が出され、5月14日の官報で「ペトログラードの食糧状態は異常に困難である」とのペトログラード・ソヴィエトの訴えが公示された。⁽¹⁴⁾

事実5月はペトログラードにとって正に危機的状況であった。ペトログラード市中央食糧参事会によって採られた措置にも拘らず、食糧生産物の搬入は最低の数字にまで達した。5月半ばまでの4カ月半で予定された穀物470万プードのうち全部で様々な穀物生産物約69,4万プードが調達され、積荷されただけで、この期間に県食糧委員会宛に全部で277輛、即ち27,7万プード（穀類と麦粉）が到着したただけであった。当時の県人口（同委員会の資料によれば県の総人口140万60人のうち116万430人が穀物の購入を必要としていた）が月間14万5165プードを消費していたときに、5月18日現在、同委員会の管轄には、小麦粉240プード、大麦粉12プード、オート麦粉18プード、黍60プード、脱穀黍 пшено 85プードの僅かの穀物生産物が残されていたただけであった。⁽¹⁵⁾パン配給の不足はペトログラードの住民間に不満を引き起こし、それはパニックとなって食糧組織への狼藉や過激行為となって現れ、市内の中央地区では街頭での集会があちこちに開かれ、様々な議論やボグロムの扇動が行われた。民衆の中にはパンがないために国を資本主義に戻す必要があるといったデマを信じたり、ソヴィエト権力を中傷したりする人々が現れた。ペトログラードからドイツに穀物が搬出されているとの風聞も流れた。郊外の労働者地区や工場では勤労者の間で大きな動揺がみられ、極めて危険な兆候が現れた。パン交付を1/8フントに引き下げる中央参事会の命令にも拘らず、幾つかの地区では食糧組織に集まった敵意ある群衆の圧力の下に倉庫貯蔵からパンの追加交付を余儀なくされ、交付基準を1/4フントに戻した場合があった。⁽¹⁶⁾

こうしたペトログラードの飢餓と特に深く関連しながら食糧独裁令が発布されたが、地方の状況も深刻であった。例えば、5月はじめには当時のチェレポヴェツ県チェレポヴェツ郡とキリロフ Кирилов 郡でこのような反ソヴィエト暴動が起こり、チェレポヴェツ市では商人と僧侶に唆された群衆によって食糧コミサルが捕らえられるような事件があった。6月には北部オロネツ県の幾つかの郡で飢餓がはじまり、一揆が勃発し、食糧活動家は仕事を投げ出して逃亡し、破滅的状況が生まれていた。⁽¹⁷⁾飢餓は正に権力の問題と深く結びついていたのである。

当時のソヴィエト指導者の間では、ボリシェヴィキ以外の他党派の代表は穀物専売と固定価格の廃絶を要求していたとする見解に反して、⁽¹⁸⁾これら原則の堅持の下で飢餓の原因が組織上の欠陥にあるとの認識に関し基本的に一致していた。食糧独裁令を巡る各党派の論争はこの欠陥をどのように克服するかに関わっていた。

5月9日の全ロシア中央執行委員会会議で、ツェルーパーは、食糧活動の遅れを特に地方のサ

ボタージュに原因があると見て、地方のソヴィエト権力への移行が遅れた結果中央と地方との間で亀裂が生じた、と彼は指摘し、食糧活動での中央集権化を要求し、ここで食糧独裁令の布告草案を提起したのである。この間の討論の中で、「ボリシェヴィキ政府は食糧問題の解決にとって必要な組織的機関を持っていない。変革〔十月革命＝引用者〕の事実自体がサボタージュのような組織を解体させる現象を生み出した。……変革の事実自体だけでなく、一般に内戦のやり方приемыがロシア国家のこの組織的機関を粉碎した源泉であった」と革命自体を否定するメンシェヴィクのスハーノフ⁽¹⁹⁾を別にすれば、食糧業務の中央集権化の程度が議論の焦点となった。メンシェヴィクのФ.И. ダーンは食糧業務での中央集権化の必要を認めつつも、「本質的に農民への真の宣戦布告である」食糧独裁は内戦を強化し、多くの農民に播種の拡大を止めさせるだけであるとして独裁に反対した。また左翼エスエル・フラクを代表して布告草案に反対したB. A. カレーリンの論拠は次の二点に纏めることができる。第一に、「草案は非常に曖昧なやり方、非常に危険な実験に満ちている」こと、即ち、布告の農民ブルジョワジー、クラーク、穀物余剰持ち農民は曖昧な規定であり、非常措置の適用が勤労農民にまで及ぶ危険がある。第二に、現在農村にはクラークとの闘争で支柱となる勤労農民の組織＝村ソヴィエトが存在する、食糧業務の幾つかは中央集権化されねばならないが、中央集権主義は軽率な行き過ぎ、刃傷沙汰を引き起こす危険性を増大させる、従って食糧業務は地方ソヴィエトに引き渡されなければならない、として地方分権化を要求し、「我々は独裁一般に反対したように食糧独裁にも断固反対する」と演説した。⁽²⁰⁾左翼エスエルが勤労農民の組織であるソヴィエトに依拠するよう要求したのに対し、ボリシェヴィキは農民との戦争を断固主張したのである。

シリーフチェルは自らシベリアに赴いた経験に基づき、「西シベリアで納屋だけでなく未脱穀の山で脱穀所に2000, 3000, 5000, 1万, 2万, 3万ブードの穀物余剰を持つ非常に多くの農民」を農民ブルジョワジーと見做し、更に「私は恐らく全農民の9/10がこれであると敢えて言おう。これが正に階級闘争の原則を適用すれば穀物を取り上げることのできる層である」とまで述べ、続いてツェルーパーは「即座に武器を手にしてだけ穀物を受け取ることができる。……我々は農村ブルジョワジーに対する戦争を考えている」と言明した。⁽²¹⁾この根底にあるのは農民の評価の問題であった。ボリシェヴィキは、農民を階級的基準で貧農、中農、富農＝クラークに分類するが食糧独裁下ではこの基準は穀物余剰の有無であり、ボリシェヴィキの観点からは穀物余剰を持たない農民、つまり貧農こそが同盟の対象であった。従って、シリーフチェルの言に従えば、農民の90%が階級闘争を適用する対象となった。一方、左翼エスエルにとっては、農民大衆、第5回全ロシアソヴィエト大会でのM. A. スピリドノヴァの発言によれば、90%の農民大衆が雇用労働なしで経営を営む勤労農民であり、食糧独裁によってクラークではなく勤労農民が大きな打撃を蒙ったのであり、「食糧独裁は農村に差し迫っている危機であった」。⁽²²⁾この意味で、ダーンの、食糧独裁は「本質的に農民への真の宣戦布告である」との表現は全く妥当であった。⁽²³⁾貧農委員会の評価を巡ってこの問題は更に尖鋭化するのだが、左

翼エスエルにとって、貧農とはバトラーク分子であり、怠け者であり勤労農民の概念とは区別されていた。⁽²⁴⁾

そして食糧危機を巡る議論は、食糧独裁＝過度な中央集権化を要求するポリシェヴィキと、地方ソヴィエトの自立的活動＝地方分権化を主張する左翼エスエルとの間の農村権力に関わる問題へと展開する。つまりポリシェヴィキは、既に指摘したような地方ソヴィエトの状況、地方ソヴィエトが次々と中央政府の食糧政策に反対している状況の中で農村の権力基盤としてのソヴィエトには否定的であった。ツェループは5月9日の前述の会議で、地方ソヴィエトに支柱を求める必要性を原則的には認めながらも、「これらソヴィエトが穀物専売と穀物固定価格を廃止する大会を召集するなら、そのようなソヴィエトと我々は闘うことは明らかである」と付け加えるのを忘れなかった。⁽²⁵⁾ 5月20日の中央執行委会議でスヴェルドローフは農村ソヴィエトのより深刻な状態を報告した。「県ソヴィエト大会並びに郡ソヴィエト大会の報告から、郷ソヴィエトでの指導的役割はクラーク＝ブルジョワ分子に属し、彼らはあれこれの党派、専ら左翼エスエルのレッテルを貼ってソヴィエト施設に入り込み、それを通して自らのクラーク的利益を実現しようとしていることは明らかである。……農村クラーク分子は今日まで著しい力を示している」と述べ、飢餓の克服のための貧農の組織化を提起した。「農村で革命的ソヴィエト組織、現実に革命的貧農を統合する組織……を創設するなら、その時我々は一つにはクラークとブルジョワジー連合からくる農村のあらゆる危険と、飢餓からのもう一つの危険を著しく排除できると言うことができる」と。⁽²⁶⁾ これに対してカレーリンは、概ねスヴェルドローフの結論を受け入れるとした上で、「地方権力の担い手」が食糧政策を実行しなければならないことを強調した。⁽²⁷⁾ ポリシェヴィキは農村の権力基盤としてソヴィエトに替わる貧農の組織化を主張し、左翼エスエルは勤労農民を基盤とした地方ソヴィエトに立脚するよう要求した。

18年夏のこの論争は元々は穀物危機に関する問題が発端であった。これに関して穀物専売制の保持と食糧業務の中央集権化の枠内では、ポリシェヴィキと左翼エスエルとはそれほど大きな相違はなかった。しかし農村権力を巡る問題、または農村革命の評価に及んで両派は完全に分裂した。ポリシェヴィキは農村「プロレタリア」革命を要求し、このために「穀物戦争」を宣言し、都市労働者を動員する必要があった。5月13日布告で食糧人民委員部が行使する非常大権に法的根拠が与えられ、⁽²⁸⁾ 5月27日布告は食糧機関をソヴィエトを超越した強力な中央集権体制に再編した。食糧独裁と呼ばれたこの体制は穀物調達だけでなく農村権力にも深く関わっていたが故に、ソヴィエト指導部内で極めて厳しい対立を現出させたのである。この農村「プロレタリア」革命を遂行するため、食糧人民委員部に非常大権を与える布告が人民委員会議で採択されたその日、5月9日レーニンの「労働者の動員」案が採択され、食糧独裁の確立とともに食糧部隊の編成と派遣が組織的に行われ、法制化されるのであった。

(1) Известия петр. совета, 1918, 21 марта.

- (2) Известия петр. совета, 1918, 4 июня.
- (3) Известия петр. совета, 1918, 16 мая.
- (4) Известия петр. совета, 1918, 14 апреля.; Известия ВЦИК, 1918, 10 мая.
- (5) Известия петр. совета, 1918, 19 марта.
- (6) Известия петр. совета, 1918, 27 марта.
- (7) 北部州食糧参事会は、ペトログラードからモスクワへの遷都に、特に食糧人民委員部の移動に関連し、ペトログラードに支部を残し臨時にモスクワへ移った(Известия.петр. совета, 1918, 23 марта.)。
- (8) Известия петр. совета, 1918, 30 апреля.
- (9) Известия петр. совета, 1918, 12 мая. ツェループは5月9日の全口中央執行委会議で、4月までの命令執行率は平均22%であったと報告した(Плотоколы ВЦИК , с. 244.)。
- (10) Известия петр. совета, 1918, 28 апреля.
- (11) Известия петр. совета, 1918, 12 мая.
- (12) Известия ВЦИК, 1918, 11 мая.
- (13) Известия ВЦИК, 1918, 12 мая.
- (14) Известия ВЦИК, 1918, 14 мая.
- (15) Известия петр. совета, 1918, 22 мая.
- (16) Известия петр. совета, 1918, 14, 15, 31 мая.
- (17) Известия петр. совета, 1918, 10 мая.; Северная коммуна, 1918, 4 июня.
- (18) 例えば, Френкин М. Трагедия крестьянских восстаний в России: 1918-1921 гг. Иерсалим, 1987 с. 41
本書は興味深い幾つかの事実が網羅されているが、著者のボリシェヴィキの政策への予断のために謬見も同様に網羅されている。
- (19) Плотоколы ВЦИК , с. 244, 253.
- (20) Там же, с. 244, 253, 255.
- (21) Там же, с. 258-59.
- (22) Пятый съезд советов , с. 58.
- (23) Плотоколы ВЦИК , с. 235.
- (24) Там же, с. 58, 74.
- (25) Там же, с. 260.
- (26) Там же, с. 295.
- (27) Там же, с. 298.
- (28) 穀物調達に非常措置が必要であるとの指摘はこれ以前にもされた。これに関する最も早い時期の言及の一つとして4月半ばの北部州食糧参事会における、5月までは既に調達された穀物で賄われるが、6月は5月中に非常措置が採られなければ破滅的になろうとの発言があるが(Известия петр. совета, 1918, 14 апреля.) 穀物調達の手段としての非常措置の行使と、食糧独裁以後の「穀物戦争」遂行のための非常大権とは本質的に異なる問題である。

2) 食糧独裁下の部隊

ソ連史家 М. И. Дави́довは、戦時共産主義期の穀物調達に関するモノグラフィーの中で、食糧部隊の編成は食糧人民委員部の一元的支配が定められる5月と、一連の食糧関連法令が出される8月とで区別されると主張する。⁽¹⁾確かに法的には、5月27日布告によれば地方の食糧委

の下に食糧人民委員部の判断で食糧部隊が設置され、また8月布告以後は食糧部隊は労働組合に統轄され、新たに設置された軍事食糧局にその任務が課せられることになる。

しかし食糧独裁下の部隊の編成に関して、実質的に双方を区別する必要はないだろう。何故なら8月以前の編成においても労働組合は大きな役割を果たし、穀物生産県の郡食糧委の管轄になる部隊メンバーの半分は、消費県の労働組合またはソヴィエト組織の推薦する候補者名簿から任命され、工場委員会と工場→地区ソヴィエトのルートによる編成が通常であった。⁽²⁾

ダヴィドフは触れなかったが、部隊の組織化に関しては食糧独裁以前と寧ろ区別すべきであろう。何故なら、第一に、食糧独裁以前は部隊を編成し派遣した主体の多くは地方ソヴィエトであり、そのほか労働組合、工場委員会、住宅委員会など様々な組織がこれに関わり、中央権力の統制が及ばない、言わば「自然発生的に組織された労働者部隊」であった。第二に、これら部隊の調達の際の強制力の行使は稀であり、調達手段は主に商品交換と徴収からなっていた。18年4月のモスクワ県食糧会議で採択された徴発部隊に関する決議では、決して武力による徴収を第一の任務としてはならず、情宣、説得、商品交換を第一にすべきであるとされた。⁽³⁾ 食糧独裁後も規程では、食糧部隊には特別監督官が随伴し、商品交換監督官を援助することになっていた。⁽⁴⁾ しかし実際には、18年末の食糧会議で食糧人民委員代理 H. П. ブリュハーノフが、穀物汲み出し手段としては商品交換は不十分であった、と総括したように、夏以後商品交換による調達は殆ど停止した。食糧人民委員部参与スヴィジェールスキが夏までの食糧政策を総括して、商品交換の崩壊によって「ソヴィエト権力は農村富農とブルジョワジーからの穀物徴発の道に立つのを余儀なくされた」と報告しように、⁽⁵⁾ 次第に食糧部隊は食糧独裁令に基づく強制手段に訴えるようになった。ツェルーパーが既に5月9日晚の中央執行委員会で、「困難を我々は予想しているが、農村ブルジョワジーに宣戦布告をする以外に解決策はない」と明言しているように。⁽⁶⁾ 第三に、当然のことながら食糧独裁下では食糧部隊の役割は穀物調達ではなく、農村での階級闘争の遂行に重点が移された。5月30日に共産党「以下断わりがなければ党とはロシア共産党（ボリシェヴィキ）を指す」中央委で報告された次のような電報が「穀物戦争」の題名で、ペトログラードの労働者に対し、レーニンとツェルーパーの連名で公表された。「……戦時中に金儲けした腹の膨れた農村クラークは、その手に以前からの収穫を残して、飢えたものに穀物を与えようと思っていない。……現在背信的役割を農村ブルジョワジーが引き受けている。……穀物専売を破壊してあらゆる反革命家は農村ブルジョワジーに依拠して、ソヴィエト権力を破滅させ、労働者と貧農を資本主義的隷属の餌食にしようとしている。

労働者諸君、もし農村ブルジョワジーから通常的手段で穀物を手に入れることができないなら、力でそれを手に入れなければならない。穀物のために闘わなければならない。そこで我々は全員にこの闘争を呼びかける。

食糧コミサルによって組織される食糧部隊の隊列に登録せよ。……この勝利を最終的にするために中小ブルジョワジーに、農村クラークに勝利しなければならない……」[強調は引用

者]。第四に、部隊に農村での階級闘争の任務が課せられ、動員が大衆的、組織的になるにつれ党が指導性を発揮するようになり、例えば18年5月28日付け党中央委の地方組織への回状の中に、食糧部隊の任務が規定されるようになった。⁽⁸⁾こうして党は食糧危機が体制の危機へと転化する段階で、労働者＝社会団体を党の下に動員する非常体制を採ったのである。この意味でも食糧独裁は戦時共産主義の開始であった。

食糧業務の中央集権化（6月1日に出されたロシア共和国の労働者への人民委員会議の訴えの表現では、「中央から発せられる指令が唯々諾々とбезпреко 地方で執行される」「理性的中央集権化」）、労働者部隊、貧農委のトリアード⁽⁹⁾からなる食糧独裁は、食糧問題が農村権力の問題と結びつくとき、ポリシェヴィキによる農村「プロレタリア」革命として具現化され、この革命の担い手が労働者部隊であった。これをレーニンは農村への社会主義の導入と同一視した。彼は、「ソヴィエト共和国は先ず両首都から、先進的な武装せる労働者の部隊を農村に派遣している。これら労働者は農村に社会主義を持ち込み、自分の側に貧農を引き寄せ、彼らを組織し教育し、ブルジョワジーの抵抗を打ち負かすよう彼らを援助している」と評した。⁽¹⁰⁾

具体的には次のように部隊が編成された。

6月4日、党モスクワ委員会は、「1）部隊は党組織と工場細胞の最も厳格な統制の下に選抜されねばならない、2）部隊の長にモスクワ委 MK と中央委 ЦК の推薦により最も意識の高い労働者がならねばならない……、5）指定地に到着後部隊は現地ソヴィエトと党細胞と最も密接な関係を持たねばならない……、7）代表団とその家族は物質的に保証されねばならない、彼らの維持のため工場で得ていた賃金を留保することが必要である、8）帰宅の際に如何なる食糧も持ち帰ることを堅く厳禁する」旨の食糧部隊の組織化に関する基本指令を採択し、⁽¹¹⁾同委は各党コレクチーフから5%以上の党員、各工場から1%以上の労働者を動員すること、入隊した労働者には以前の平均賃金、失業者には月300ルーブリ以上が支払われると指示した。⁽¹²⁾

6月11日のモスクワ労働者代表ソヴィエト大会で、モスクワの食糧独裁問題が討論された。議長のリシェヴィク、П. Г. Смирнов-Вич Смирнович は、食糧の悪化を避けるために工場で食糧部隊を組織しなければならない、食糧独裁のため幾つかの部隊が派遣された、と報告した。ポリシェヴィキ・フラクは、ロシア革命の不幸はこれ以前に独裁の措置に頼らなかったことにあり、ロシア革命は労働者の利益のために展開されなければならないと露骨に労働者の立場を代弁した。メンシェヴィキ・フラクは、食糧部隊は地方で流血を引き起こし、農民を単に反労働者にするだけであろう、と正鵠を射た指摘をしている。左翼エスエル・フラクは、食糧部隊が貧農の利益だけで派遣されていることに反対し、一定の階級としての勤労農民に依拠するよう要求した。これに対してポリシェヴィキは、右翼エスエルとメンシェヴィキは地方で情宣し、労働者に予定されている穀物がドイツに行くと言われ貧農に思わせ、この結果、貧農はクラークに走り、「穀物をくれ、我々はおまへの納屋を守ってやろう」とクラークに言うようになったと彼らを非難した。左翼エスエルに対しては、あらゆるソヴィエト活動は一様であり、

その間の意見の相違はありえない、工場により選抜され地方に赴いた部隊が現地のソヴィエトに逆らって活動しているとの前提は反論の余地がある、と批判した。ポリシェヴィキの反論は図式的であり、反対派の主張の方が当時の問題点を的確に捉えていた。ともあれ最終的には、「……穀物の調達と分配は食糧人民委員部に中央集権化し……地方に向かう食糧プロレタリア部隊の創設のため」、次のポリシェヴィキ・フラクの食糧部隊に関する決議が同大会で採択された。「1）全ての工場、作業場、商業、運輸施設の労働者は全体集会で100人につき1人の労働者を食糧活動に選出する。選出は1週間以内に工場委員会により組織される。2）選出された労働者は地区ソヴィエト食糧部隊に編入される。……3）食糧業務に選出された労働者は企業でのポストとそこから受け取る給与を留保する⁽¹³⁾」。先の党委の指令とほぼ同じである。

ペトログラードでも、モスクワと同様に党組織の指導の下に、部隊の組織化が行われた。5月23～24日に食糧部隊の指導のためモスクワから全権が到着し、その後ペトログラード・ソヴィエトは地区ソヴィエトに食糧部隊に送り出す労働者を2倍にするよう義務づけた。また入隊者には靴、衣服、糧食が無償で支給され、月150ルーブリの賃金が支払われた⁽¹⁴⁾。市内全域でのカムパニアの中で、5月31日の党活動部集会で、ペトログラード労働者から部隊を編成するためのトロイカが選出され、6月1日には全地区党委員会に部隊編成に関する規程の回状が送られた。そして工場コレクチーフに従業員の3～5%を食糧部隊に派遣するよう指示が出された⁽¹⁵⁾。5月末にはペトログラード軍事コミサル・Н.Т. スミールガは、ペトログラードへの穀物搬出のため、労働者と赤軍からの強力な部隊が組織されていると述べている。ペトログラードの隅々で会合が組織され、食糧組織の活動家たちが動員され、飢餓との闘争に関する演説が行われ⁽¹⁷⁾、ペトログラード・ソヴィエトの機関紙は5月末から6月初めにかけて連日のように「地区ソヴィエトへ登録せよ」と労働者部隊の組織化を訴えた。6月6日の全市協議会では、ジノーヴィエフは、労働者諸君、自分の部隊を組織せよ、諸君が信頼する自身の同志の手でこれを行え、労働者が穀物を手に入れ、鉄道従業員がこれを運搬する、些かの遅れも任務を駄目にすることを理解せよ、武器、織物、紙幣を取れと演説し、拍手を浴びていた⁽¹⁸⁾。

このように食糧部隊の組織化は、党が嚮導する大衆カムパニアとなり、食糧戦線に多数のコムニストが動員された。

ペトログラード地区委は、部隊の構成に地区党活動家の一部を選抜し、最も有能で経験あるオルガナイザーを組織するよう指令した⁽¹⁹⁾。8月14日付け党モスクワ州ビューローの回状では、1）前線へのコムニスト部隊の派遣、2）貧農委の援助で余剰穀物の収用のため徴発部隊の組織化、3）赤軍と貧農委の組織化のための情宣、組織活動、4）日常の党、ソヴィエト活動の目的で、地方の全党委にコムニストの動員とこれら積極的活動家の25%以上の前線と食糧業務への配属を義務づけた⁽²⁰⁾。このようなものが5月27日布告で規定された食糧部隊、即ち、消費地区で編成派遣され生産諸県の食糧組織の管轄下に入りその指示に従属する労働者部隊であった。

しかしながら、元々食糧人民委員部を含めて各地方の食糧組織は無計画に部隊を集め、活動

し、これら部隊の圧倒的多数は最も信用ならない無知な分子からなり、このような部隊は毎日に自壊し、食糧人民委員部にとっては食糧業務を解体させていると思われ、食糧人民委員部は意識の高い労働者と貧農からなる組織的部隊の創設に着手した。⁽²¹⁾これが食糧軍である。

18年5月20日に食糧部隊の活動を指導するため食糧人民委員部の下に、全食糧部隊総コミサール・軍事指導者管理部（後に食糧軍管理部に再編）が設置され、⁽²²⁾29日、ツェルーパーはモスクワ州ソヴィエトの推薦で、Г. М. Зсмановичを軍事司令官に任命した。彼はルビーノフ Рубинов, グレーヴィッチ, ナターボフ Натапов らと共に食糧軍編成に向けての活動を開始した。6月6日付けで食糧人民委員部総管理局により出された指令では、ソヴィエトにより編成される部隊は全ロシア的規模で単一の食糧徴発軍を創設すると唱われた。食糧人民委員部参与会回状により、部隊は党組織、ソヴィエトから推薦される志願兵から構成され、⁽²³⁾食糧軍連隊を創設するため食糧人民委員部下に食糧軍特別管理部が設置された。⁽²⁴⁾6月18日のモスクワ市地区ソヴィエト代表者会議で3人からなる食糧軍編成局幹部会がズスマノーヴィッチの下に選出され、⁽²⁵⁾A. シリーフチェルの名で6月23日には次のような指令が出された。

……農村は喜んで穀物を投機人＝かつぎ屋に販売している。……農村クラーク＝富農からの穀物の取り上げが強奪の形にならないようにするため、没収した穀物の一粒も投機人の手に入らないようにするため、労働者の規律ある軍の創設が必要である。そのような軍の創設に食糧人民委員部は既に着手した。

同志諸君、労働者よ、急いで自分の隊列に登録せよ。……直ちに各工場で特別食糧集会を召集し、以下の規程に準じて食糧軍を動員せよ。

1) 各工場は25人毎に1人を提供する。2) 食糧部隊への入隊の希望を表明するものの登録は工場委員会が行い、後者は動員されるものの名簿を2部作成する。1部は食糧人民委員部に提出し、1部は自分に残す。3) 名簿の下に、各候補の個人的自発性と革命的規律についての工場委員会または労働組合組織またはソヴィエト組織またはソヴィエト施設の責任者からの保証が付けられねばならない。食糧軍のメンバーの選抜は、一点の染みもないように考慮して行うべきである、何故なら飢餓からの何百万の勤労大衆の救済の名目で、集約的略取者＝クラークと戦いに農村に赴くのだから。……5) 軍に登録されたものは自分の以前の給料、食料給 *пищевое довольствие*、軍装支給 *обмундирование* を事実上の入隊の日から受け取る。⁽²⁶⁾

ペトログラードでは、地区党委により作成された名簿に基づき、ペトログラード・ソヴィエト幹部会下の部隊編成委員会（食糧軍管理部全権 A. H. Бобровが指揮）が食糧軍を編成し、部隊に給与を渡し、モスクワの食糧人民委員部に送り出した。⁽²⁷⁾

6月28日には食糧徴発軍最高司令官ズスマノーヴィッチの名で、「全員に組織し始めるよう要請する、部隊が組織されたところで、直ちに軍装支給、武器、食料給の交付のためモスクワに派遣せよ。同志諸君、一刻も遅れるな。穀物を汲み出そうとするクラークとの闘争で武力

が必要である。食糧部隊を出すのが早いほどよい、急げ！」との訴えが全ソヴィエト、執行委員会、県食糧委、軍事コミサール、鉄道委員会、ボリシェヴィキ党組織に出された。⁽²⁸⁾

様々な武装部隊が徐々に食糧軍に統合され、7月半ばで11000人の労働者が食糧軍として活動していた。⁽²⁹⁾この中で赤軍の中からも食糧部隊が編成された。例えば、7月23日付けで党中央委からヴォログダ県キリロフ郡党委に、赤軍から穀物没収のための徴発部隊を組織せよとの指令が出され、⁽³⁰⁾現実に各地で赤軍部隊が食糧部隊として活動していた。逆に、食糧軍が正規軍として活動する場合があった。ズマノーヴィッチは、「軍は食糧徴発活動の分野だけでなく、チェコ軍（エカチェリンプルグ近郊とヴィャトカ県で）、白衛軍、カザークとの戦闘行為の局面で本領を発揮した……」⁽³¹⁾と述べている。こうして赤軍と食糧軍との関係が曖昧になった。

7月23日のモスクワ・ソヴィエトでスヴィジェールキはこの時期の食糧軍の編成と活動について次のような報告を行った。

ソヴィエト権力は穀物徴発の道に立つのを余儀なくされ、クラークとの闘争のため赤軍と同じ基盤で食糧人民委員部は特別徴発食糧部隊を組織している。赤軍並びに食糧部隊は同じ基盤で構築されねばならないことが実践で示された。

5月23日以降1万140人を集めるのに成功した。そのうち様々な県の地方に8000人以上が赴いた。予備に1381人がある。地方からは新たな部隊の派遣が要請されている。

このほかモスクワに部隊の補充のために人々が派遣されている。そのように2週間で食糧軍は2万を隊列に数えるであろう。左翼エスエル反乱の際に、モスクワでは食糧部隊の予備役が反乱の鎮圧に利用された。1カ月半の部隊の活動期間で、全部で204万ブード余を徴発した。

残念ながら、部隊のスタッフの半分はペトログラードの労働者により補充された。我が繊維地区〔モスクワ、イヴァノヴォ＝ヴォズネセンスク県〕はより少ない数しか提供せず、オリョール、クルスク、ヴォロネジ県は更に少ない数である。ペトログラードの労働者が負っている重い負担を全労働者の間で分けるようにすることが必要である。……商品交換のほかに、崩壊との闘争を、言葉ではなく、実際にクラークとの決定的闘争を我々は行わねばならない。⁽³²⁾

この時期は食糧軍への食糧部隊の編成がボリシェヴィキ政府の方針であった。7月2日、穀物専売を廃止したペンザ県へ人民委員会議議長レーニンの名で、「穀物配給券の増加を唯一確実にする手段は、力ずくでクラークから穀物を徴発し、それを都市と農村の貧民に引き渡そうという人民委員会議の決定である。このためには、貧民が速やかに断固として食糧人民委員部により創設された食糧軍に加入することが必要である」として、ペンザ県ソヴィエト大会に前掲の規程に準じて食糧軍への登録に着手するよう訴えている。⁽³³⁾

とは言え、食糧軍は当初から問題を孕んでいた。正規軍の側からは、食糧軍を正規軍化しようとし、9月半ばにはモスクワ食糧師団政治コミサール・ナタポーフは、赤軍原理で編成され、

師団、連隊、大隊、中隊などで構成され、穀物地区を管区に分ける食糧軍組織化草案を作成した⁽³⁴⁾。一方、労働者の側からは、食糧軍の食糧活動への不信感が見られた。18年6月初めの労働者代表ソヴィエト、モスクワ市食糧委員会参事会、幹部会会議で、「食糧軍編成に関する指令は、主に政治的側面を配慮しているため、……食糧活動の基礎に据えるべき何等責務を含んでいない」ので、食糧業務を更に悪化させ、地方での食糧組織の活動を不可能にする恐れがあると決議された⁽³⁵⁾。実際、食糧軍は穀物調達では大きな成果を挙げなかった。クルスク、タムボフ、ペンザ、サマラ4県の不完全な資料によれば、18年で食糧軍により1420万プードの穀物が調達されただけであった⁽³⁶⁾。

このような部隊編成上の混乱は、8月以後の一連の改革後も拡大されるのは次節で検討するとして、現地での食糧部隊の活動の幾つかの実態に触れてみよう。

ポリシェヴィキの図式によれば、穀物なし農民＝貧農は都市労働者と共に、余剰持ち農民＝クラークと対立するはずであった。

このような例がない訳でもない。6月のトヴェリ県ヴェシエゴンスク Весъегонск 郡の2郷の集会では、クラークの圧力で穀物自由商業が認可されたが、投機人が現れたために穀物価格は急騰し、飢えた人々は郡ソヴィエトに自由商業の停止を訴えた。更に彼らは、クラークから穀物を没収するため、郡ソヴィエトに赤軍の派遣を要請した⁽³⁷⁾。ニジエゴロド県モスクワ＝カザン線のムフトロヴォ Мухтолово 駅近くのC村とT村で隠匿穀物の没収を終えた小部隊は、森の中で武装団に荷馬車の積荷を下ろせと命じられ、この威嚇をくぐり抜けた部隊が今度は村で、ライフルとリヴォルヴァーで武装した40人のクラークの待ち伏せに遭い、戦闘で1人の民警だけが逃げる事ができたと伝えられたように⁽³⁸⁾、クラークが穀物の没収に頑強な抵抗を示した報告は多数ある。

こうした徴発部隊と農民との衝突が至るところで頻発した。6月の食糧人民委員部機関誌に、ヴィヤトカ県マルムイジュ郡では穀物の没収の際に買付委員会のメンバーと赤軍兵士が殺傷され、ソヴィエトメンバーが虐殺された、ヴォロネジ県ゼムリャンスク Землянск 郡では、群集は「トゥーラ県」エピファニ Епифань 没収部隊の隊長を殺害した、クルスク県では、組織された食糧民警はライフル、爆弾、機関銃で攻撃する農民の激しい抵抗に遭遇している、コストロマ県コストロマ地区では、殆ど毎日農民と赤軍との間で激しい戦闘が行われている、と各地での様々な食糧部隊と農民との軍事衝突が報じられた⁽³⁹⁾。そして多くの報告は部隊への抵抗にはクラークだけでなく、多数の農民大衆が参加したことを物語っている。

5月26日には、今度はオリョール県のモスクワ＝カザン線のズミエフカ Змиевка 駅に村で穀物の徴発を行う150人の食糧部隊がオリョールから到着した。これを知った農民は部隊を包囲し、戦闘もなしに部隊は武装解除された。農民は大砲と機関銃を取り上げ、駅から12ヴェルスタ離れた村に捕虜を連行し、納屋に閉じ込めた。捕虜の救出のため新たに240人の部隊が村に送り込まれた。農民は彼らも武装解除しようとしたが失敗し、オリョールから大砲と装甲自

動車が到着したので農民は銃殺を恐れて、捕虜の釈放と大砲の返還を申し出た。⁽⁴⁰⁾

また7月初めにはトヴェリ県から内務人民委員部に次のような報告があった。

7月初め、ペールィ Белый ソヴィエト執行委員会の命令によって、ホルムスカヤ、ポクロフスカヤ郷で家畜仲買人 прасол から家畜を没収するため赤軍兵士の部隊が到着した。最初は部隊の活動は平和裡に行われたが、7月7日日曜日、ホルム村のバザールで3人の兵士が群集のサモスード〔私刑〕を受けた。次の収穫から必要量の生産物だけが残され、残りの全余剰は貧民の間で分配するため共同納屋に集荷されるであろうとの兵士の言葉が導火線となったのだ。サモスードを止めさせようとする郷ソヴィエト執行委員会メンバーの試みは成功せず、同日サモスードについての通報を受けたペールィ執行委員会は、赤軍部隊を随伴する「反革命との闘争に関する非常予審委員会」をホルムへ派遣しようとした。しかし執行委員会の要請にも拘らず、住民との関係を尖鋭化しないようとの配慮で部隊の派遣は見送られた。

翌日、ホルムスカヤ郷ソヴィエトに機関銃と自動車を持った75人の赤軍部隊の派遣が電報で通知されたとき、事件を平和的手段で終わらそうとする郷の希望を予審委員会に表明するため、[郷] ソヴィエトから2人の代表が送られた。だがホルムスカヤ・ソヴィエトは代表の派遣だけでなく、防衛措置も採っていた。現有の武器を持って郷の全男子が集められた。

代表がポクロフスカヤ [郷] ソヴィエトにも派遣された。代表と予審委員会の交渉の後、最後通牒が出された。委員会は捕虜の引渡しと村の住民の持つ武器の引渡しを要求した。

ホルム村に戻る代表の後に続いて、偵察のため30人の赤軍兵士が派遣された。だが偵察隊はポクロフスカヤ郷の市民に武装解除され拘留された。この後、ポクロフスカヤ、ホルムスカヤ郷の市民は、部隊の残りの武装解除することを決定した。群集の一部は後方から迂回路で部隊に近づいた。

だが降伏を望まない赤軍兵士は機関銃の銃火を開いた。これに応じて、後方に向かっていった反乱部隊は小銃を発射した。銃撃戦で9人の赤軍兵士が殺された。[赤軍部隊は] 2丁の機関銃、銃弾、自動車、手榴弾、その他の武器を遺棄し、逃走した。何人かの赤軍兵士は捕らえられ、皆殺しにされた избиты。

赤軍兵士の逃走の後、ホルムスカヤ・ソヴィエトは事件を隣接の郷ソヴィエトに通知した。隣接郷の一部は反乱を起こした郷を支持する決定をした。この郷には別の武装部隊が送られた。⁽⁴¹⁾

これらの事例が示している、農民大衆の頑強な抵抗の組織的基盤は何であったのか。それを示唆する6月半ばのベルミ県からの食糧コミサールの次のような報告がある。

クンゲール Кунгур, Камышлов Камышлов, Екачелин Бурк郡の大部分の農民は、帰り来ぬ ロマノフ 時代に共感していた富裕農であったが、ここでペトログラード食糧部隊はほぼ3週間で1万プードの穀物を徴収し、幾つかのソヴィエトでは数年分の穀物を隠匿

していたクラークの名簿を提出させ、活動は順調であった。「しかしカムィシロフ郡の村では状況が異なった。村に到着した部隊は教会の執事の所に1916年以來の小麦が3000ブード隠匿されているのを知り、クラークに圧力をかけこの小麦を固定価格で供出させた。勘定を済ませた部隊は穀物を荷馬車に積んで最寄りの駅に出かけた。だが穀物を運ぶ部隊が村から3ヴェルスタ離れたところで、元の穀物所有者を先頭に200人が追撃するのが見えた。部隊が村を離れるや、クラークの頭目が教会の警鐘набатを打ち鳴らし、スホードを召集し、そこで教会長老が貧者に殆ど無償で提供しようとしていた穀物を部隊が1カペイクも払わず取り上げたのだと群集を扇動して、部隊を追跡したのであった。部隊は追跡した農民と話し合いを持つために何人かの代表を送ろうとしたが、彼らが近づく間もなく警告の射撃が行われ、そのうち1発が食糧活動家に重傷を負わせた。援軍が到着し、⁽⁴²⁾群集の一部を敗走させ、一部を降伏させた」。

この報告で特に興味あるのは、教会の鐘が鳴らされ、スホードが召集され、そこでこの群集が部隊を追跡したことである。教会の鐘（ナバート）は共同体農民の結集の合図であった。ソヴィエト権力と共同体農民の対立でナバートが鳴らされたニジェゴロド県から内務人民委員部に入った実例をもう一つ引用しよう。

スロボドスコエ Слободское 村でソヴィエトに替わり、ゼムストヴォ参事会が復興した。このために、ニジェゴロドから地方権力の問題を明らかにするため、11人の赤軍兵士が村に派遣された。

権力の問題を審議しようとする提案に、スホードで、農民は如何なるソヴィエトも認めないと言明した。赤軍兵士は3人の郷参事会員を逮捕し、逮捕者をニジェゴロドに移送するため、カドニツィ村経由で埠頭に向かった。

スロボドスコエ村の農民たちは支援を近隣の村落の市民に呼びかけ、銃砲で武装し、逮捕者を解放するために赤軍兵士に対し銃撃した。カドニツィ村にやってきた武装した群集は、大騒ぎ тревога を起こし、ナバートを鳴らした。だがカドニツィの住民は、誰も逮捕者の解放に参加しなかった。群集は汽船埠頭まで行き、赤軍兵士に退去と逮捕者の引渡しを要求した。これが拒否された農民は埠頭一帯を銃撃した。銃撃の際に埠頭の職員が負傷し赤軍兵士の一人が死亡した。

赤軍兵士は埠頭に近づく汽船に援軍を求めた。激怒した群集は汽船が迂回するよう銃撃を加えた。汽船は通過した。赤軍兵士は武装解除され、スロボドスコエ村に連行された。自分で赤軍兵士を援助することのできないカドニツィ・ソヴィエトは、60人の増援部隊を訴え、彼らは汽船で到着した。

この部隊は逮捕された赤軍兵士の解放に向けての秩序の確立のため、スロボドスコエ村に送られた。この時まで、この村の住民は急ぎ反乱 возстание を決起し、隣接の村落を集集させていた。部隊は射撃で応えた。銃撃戦で村の何人かが殺された。まもなく部隊は暴動

を鎮圧するのに成功し、赤軍兵士は解放された。反乱側の7人が逮捕された。部隊長の命令で、彼らのうち2人は銃殺され、残りはニジェゴロドに送られた。⁽⁴³⁾

正にこのように、ナバートが農民決起の合図であった事実を、食糧人民委員部も認識していた。食糧人民委員部機関誌には、「没収が実施される際にはクラークに教会の鐘を鳴らさせないように、没収部隊は先ず第一に教会と鐘楼を占拠するという独特の戦略が考案されたのである。何故なら現実が示しているように、教会の鐘は常に虐殺へのプレリュードであるので」と指摘された。⁽⁴⁴⁾実際にこの「戦略」が例えば、ヴォロネジ県で次のように適用された。

クリコヴォ村に派遣された赤軍兵士部隊は先ず、教会を包囲し鐘楼を閉鎖した。銃撃が遠くに鳴り響いた。クラークが抵抗するだろうと警告されたが何事もなかった。クラークは全員森の中に隠れていたことが後で分かった。ソヴィエト議長だけが現れ、穀物のあり場所を申告するよう命じられた。武器の没収に取り掛かり、10丁のライフル銃、8丁のリヴォルヴァー、爆弾が押収された。丸1日かかって3000プードの穀物を押収した。⁽⁴⁵⁾

また次は、ソヴィエト史学でクラークにより唆された農民大衆の反乱、所謂クラーク反乱と分類された例である。

ヴォロネジ県ゼムリャンスク郡の一つの村落に5月20日、食糧部隊を伴って穀物徴発に関するコミサル E 某が到着した。彼は部隊をここに残し、K 村に向かった。村の住民は既に部隊の到着を知り、途中で E 某は武装農民の群集に遭遇した。彼は武装解除され、村スホードに連行された。彼は住民を略奪に來たのだとする何人かの弾劾演説の後、スホードは挙手で彼を銃殺する決定を下した。タムボフ県ウスマニ Усмань 郡 K 村でも、クラークによりソヴィエトメンバー捕獲のための武装部隊が組織され、コミサルはスホードで死刑判決を受けた。⁽⁴⁶⁾

このような所謂クラーク反乱も、スホード決議に基づく共同体農民の大衆運動に支えられていたのである。

つまり共同体農民は一体となって食糧部隊への抵抗をしめたのであった。カバーノフが指摘する食糧部隊に伴う人為的分裂とは、農村内の階級的分裂ではなく、都市プロレタリア対勤労＝共同体農民との分裂であった。5月20日の中央執行委員会でスヴェルドローフは、農村を二つの敵対する陣営、貧農と農村ブルジョワジーに分化させることで農村革命を遂行するよう主張した。⁽⁴⁷⁾農民の一体性に「農村内階級闘争」の楔を打ち込もうとしたのが、都市労働者の食糧部隊であり貧農委員会であった。しかしそれは益々都市権力対共同体農民との亀裂を深めるだけに終わった。7月5日の第5回ソヴィエト大会で左翼エスエルのカムコーフは次のように的確に表現した。貧農と勤労農民とのこの分裂は人為的分裂であると確信している、我々は中央からの部隊に労働者の前衛的部分、最も意識の高い労働者でなく農村を略奪しようと思う人々が入っていることを確信している、「都市によって宣告された農村への戦争が行われている」。⁽⁴⁸⁾

- (1) Давыдов М. И. Указ. соч., с. 89
- (2) Известия ВЦИК, 1918, 15 дек. レーニンが5月9日に、「飢餓との闘争での労働者の動員について」で「労働組合との合意で食糧人民委員部の絶対的指導の下で」意識の高い労働者の動員を提案した（Ленин В. И. Полн. Собр. соч., т. 36, с. 319.）。
- (3) Изв. Наркомпрода, 1918, № 4/5, с. 22.
- (4) Правда, 1918, 12 июля. ウファール県でこの実例が報告されている（Известия ВЦИК, 1918, 13 июля.）。
- (5) Известия ВЦИК, 1918, 25 июля. 現代のアメリカ人研究者チェイスも、食糧独裁とそれ以前の政策の「決定的相違は、商品交換部隊から食糧徴発部隊への転換であった」と同様な指摘をしている（Chase W. J. op. cit., p. 23.）
- (6) Протоколы ВЦИК, с. 250
- (7) Известия петр. совета, 1918, 31 мая.
- (8) Переписка, т. 3, с. 77-78.
- (9) 和田 春樹は名著『農民革命の世界』（1978年、東大出版会）の中で当時の食糧政策を「食糧独裁、労働者食糧軍、貧農委員会の三本の柱からなるソヴィエト政権の路線」と捉えている（87頁）。筆者は5月布告だけでなく、前章で触れたように、食糧独裁をより包括的に、一つのシステムとして捉えている。またこの時期出された長文の「人民委員会議の訴え」の中で、「中央集権化、飢えた労働者と農民の意識の高いカードの組織的利用、穀物諸県の貧農の統合」が、5月27日の食糧組織再編の布告の任務とされているように（Известия петр. совета, 1918, 1 июня.）、5月布告の曖昧な規定も、これが食糧政策の全体的方針の宣言であることを物語っている。
- (10) Ленин В. И. Полн. Собр. соч., т. 37, с. 314.
- (11) Изв. Наркомпрода, 1918, № 12/13, с. 30.
- (12) Стрижков Ю. К. Указ. соч., с. 70.; Давыдов М. И. Указ. соч., с. 93.
- (13) Известия ВЦИК, 1918, 12 июля.; Изв. Наркомпрода, 1918, № 8, с. 13. ここでモスクワ食糧業務の指導者としてシェーフレルを含む4人に全権を付託し、その活動の全責任が労働者代表ソヴィエトに対して課せられた。
- (14) Гоголевский А. В. Указ. соч., с. 123.
- (15) Кулышев Ю. С., Тылик С. Ф. Указ. соч., с. 22-23.
- (16) Известия ВЦИК, 1918, 30 мая.
- (17) Северная коммуна, 1918, 9 июня.
- (18) Северная коммуна, 1918, 9 июня.
- (19) Кулышев Ю. С., Тылик С. Ф. Указ. соч., с. 24.
- (20) Из истории гражданской войны в СССР, т. 1, М., 1960, 148.
- (21) Гурвич Е. А. Правда, 1918, 31 дек.
- (22) Бабурин Д. С. Указ. статья., с. 344.
- (23) Стрижков Ю. К. Указ. соч., с. 73.; Известия ВЦИК, 1918, 31 дек.
- (24) Кулышев Ю. С., Тылик С. Ф. Указ. соч., с. 24.
- (25) Известия ВЦИК, 1918, 22 июня.
- (26) Известия ВЦИК, 1918, 23 июня.
- (27) Кулышев Ю. С., Тылик С. Ф. Указ. соч., с. 24.
- (28) Известия ВЦИК, 1918, 28 июня. 同じ頃食糧軍創設者の一人は、責任ある活動家の派遣とかつぎ屋との闘争のためモスクワで徴発連隊を組織するのが必要であるとモスクワ県食糧コミサールの会議で報

告した(Известия ВЦИК, 1918, 13 июня.)。フレーンキンは食糧軍編成地としてモスクワと〔スモレンスク県〕ヴィヤジマを挙げているが資料的に確認できなかった(Френкин М. Указ. соч., с. 48.)。

- (29) Давыдов М. И. Указ. соч., с. 93.
- (30) Переписка..., т. 3., с. 117-18.
- (31) Белов Е. И. Внутренние войска в первые годы Советской власти. — Из истории гражданской войны..., с. 231.
- (32) Известия ВЦИК, 1918, 25 июля.
- (33) Известия ВЦИК, 1918, 2 июля.
- (34) Известия ВЦИК, 1918, 24 сент.
- (35) Изв. Наркомпрода, 1918, № 6/7, с. 17-18.
- (36) Белов Е. И. Указ. статья, с. 231.
- (37) Изв. Наркомпрода, 1918, № 8, с. 19.
- (38) Изв. Наркомпрода, 1918, № 8, с. 32.

(39) Изв. Наркомпрода, 1918, № 9, с. 29. 労働者部隊と農民との激しい戦闘の要因として、潜在的なポリシェヴィキへの恐怖心に加えて飢餓によるパニック的気分があったことは疑いないが、当然そこに革命対反革命の図式を含めねばならない。所謂白色テロの次のような例が、ドン管区に隣接するサラトフ県ノヴォウゼンスク Новоузенск 郡アレクサンドロフ=ガイから報告された。村に「3丁の機関銃と1門の軽火器を持った240人の赤軍部隊がいた。敵の優れた兵力が3方面から村に攻撃をかけた。敵側に我が弱点を教えたクラークのために、カザークは村に侵入した。通りで白兵戦がみられた。大砲を持った赤軍兵士の小グループはカザーク軍団の攻撃を必死で防いだ。大村 слобода 全部がカザークの手に落ちたとき、生き残った同志は射撃を止め、粉挽小屋に退却し、そこで機関銃の銃火を開いた。カザークは最初の仕事として、郷ソヴィエト議長チュグンコフの搜索を始めた。だがチュグンコフとチューリコフは援助を要請するためノヴォウゼンスクに向かっていた。村から12ヴェルスタの所で彼らはクラークに逮捕され、カザークの手に引き渡された。古い習慣によりカザーク兵の鞭刑が行使された。チュグンコフは四つに切断された。チューリコフは耳、鼻、顎を切り取られ、背中から肉をはぎ取り、その後で殺害された。

同日多数のソヴィエト活動家が銃殺された。後日クラーク大会が開かれ、そこで全ポリシェヴィキを銃殺にすることが決定された。クラークが証言した全員が広場に引き出され、銃殺された。僧侶は感謝の祈りを捧げ、銃殺された同志の遺体に呪いを浴びせた。3日後、粉挽小屋に隠れていた赤軍兵士部隊が降伏を余儀なくされた。彼らは丸裸にされ、冷たい穴蔵に押し込まれ、そこで彼らは食糧も水もなしに3日間置かれた。その後以前に斃死した家畜を投げ込んでいた村の大きな穴に連れ込まれた……穴では同志は傷ついただけで死ななかった。全員96人が穴に集められ、穴が埋められた。傷ついた受難者から死にもの狂いのうめき声が挙がった。11の大村で675人が射殺された」(Правда, 1918, 25 сен.)。この記事の結論は赤色テロを訴えるのであるが、ソヴィエト活動家へのこのような憎悪が何に由来するのかは、筆者の能力を遙かに超えた問題である。

М. Купернинは戦時共産主義期の社会構造内で次の3主要対立を指摘する。「第一に、プロレタリアと農民に対するブルジョワ=地主反動、即ち革命と反動の間で武力を展開させる対立。第二に、革命自体内部で、都市プロレタリアと農村半プロレタリアに対する農村小ブル分子。第三の対立は、反革命陣内で、地主とクラークの間で」(Кубанин М. На аграрном фронте, 1926, № 2, с. 36.)。一見妥当な判断のようであるが、重要なことはこれら主要対立が錯綜し、個別の事例ではこれらが混在していたことである。また同様な赤色テロに関しては、Мельгунов С. П. Красный террор в России: 1918-1923, М., 1990.

の多数の実例を見よ。

(40) Изв. Наркомпрода, 1918, № 6/7, с. 52.

(41) Известия ВЦИК, 1918, 17 июля. 尚, ここで登場する家畜仲買人とは経済的にも政治的にも大きな支配力を行使していた農村の有力者。またサモスードに関する十月革命前のペトログラードの興味ある実例については、長谷川 毅『ロシア革命下ペトログラードの市民生活』, 1989年, 中央新書, 参照。

(42) Правда, 1918, 14 июля.

(43) Известия ВЦИК, 1918, 9 авг

(44) Изв. Наркомпрода, 1918, № 9, с. 30.

(45) Там же, с. 32.

(46) Шестаков А. В. Указ. соч., с. 72-73.

(47) Протоколы ВЦИК, с. 294.

(48) Пятый съезд советов, с. 74-75.

3) 8月改革と部隊の再編

全体とすれば調達計画が進捗しない中、収穫期に入った8月にソヴィエト政府により、穀物調達の一連の改革が推進された。

17年収穫時には多くの未収穫が残され、穀物の登録は十全に遂行できなかった。従って18年の収穫時には様々な方策で刈入れの組織化が奨励され、義務づけられた。

これらの措置は既に地方で先行していた。7月20日にトゥーラ県執行委員会は、穀物脱穀の義務期間を定め、10月16日までに未脱穀の穀物を没収し、農民の刈入れの援助のため労働者アルチェリを組織した。⁽¹⁾ プスコフ県セベジ Себеж 郡ではクラークの定住する郷では穀物の登録が進捗せず、⁽²⁾ スホードは勝手に郷の刈入れを行った農民を非常委員会を通して処罰するよう決定した。⁽³⁾ カルーガ県ではあらゆる郡にライ麦登録のために食糧部隊が派遣され、県外にライ麦と麦粉を搬出するかつぎ屋と投機人との闘争のためキエフ＝ヴォロネジ鉄道沿いトゥーラ・モスクワ方面の大きな駅で闇食糧取締部隊が組織され、旧地主地から穀物は貧農の援助を受けた郷ソヴィエトにより収穫され、貧農の刈入れ労働には現物が支給されていた。⁽⁴⁾ タムボフ県では穀物刈入れが郡食糧コミサリアートに課せられ、動員された勤労に対して穀物で支払われた。⁽⁵⁾ またようやく18年7月にソヴィエト権力が確立した北ドヴィナ県では、貧農からなる村委員会が旧白軍兵士を教示し、義務的賦役として畑の共同刈入れを組織し、同委員会が全穀物を脱穀し、厳重に登録し、納屋に納入し、その後この穀物を住民に分配し始めた。⁽⁶⁾

中央では8月2日執筆のレーニンの食糧テーゼに基づき、8月4～8日間で「労働者組織の穀物調達への導入について」、「刈入れ部隊について」、「闇食糧取締部隊について」、「穀物固定価格について」などの穀物調達に関する一連の布告が出された。⁽⁷⁾

8月2日付け「新たな穀物を求めて」のアピールのなかで、「……新収穫からの穀物がクラーク、富農、投機人の手に落ちないように全力を尽くさねばならない。

畑から穀物ができるだけ速やかに飢えたものの管轄に入るように全力を尽くさねばならない。

このためには労働者と貧農が最寄りの穀物地方で収穫の刈入れを組織するのが必要である。
全てを刈入れ、刈入れ＝徴発部隊へ。

部隊の一部は……旧地主地で穀物の刈入れで貧農を援助するであろう」と、穀物の登録、刈入れ、調達のために刈入れ部隊を編成するよう訴えた。⁽⁸⁾更に8月25日、食糧人民委員部は次の訴えを出した。

「農民諸君！

……諸君の畑には豊富な収穫があるが、……新穀物はまだ刈取られず、工業地区、工場で、労働者の間で飢餓がはびこっている。諸君の飢えた兄弟に穀物を与えよ……」⁽⁹⁾

8月以降は、新収穫を確保するためにも労働者部隊は益々重要性を帯び、特に地方で組織化が急速に進んだ。タムボフでは熱病のように食糧部隊の組織が進行し、「労働者を餓死させるな」、「穀物を隠匿するものに容赦のない懲罰を」などのスローガンを掲げて、食糧部隊が党委員会に赴き、県ソヴィエトと党評議会の代表の挨拶の後、部隊は徴収活動に出発した。ヴォロネジでも収穫の徴収のための労働者部隊が組織され、1日で300人の労働者が登録された。シムビルスク県アルダトフでは郡の至るところで食糧人民委員部から派遣されたエイジェントの指導の下に旧地主畑で収穫の刈入れが行われ、穀物は専ら貧農により収集され集荷場に集められた。⁽¹⁰⁾このような組織化の展開は、比較的良好な出来高にも条件づけられた。ヴォロネジからは春蒔穀物は順調、秋蒔は平年以上、ライ麦のデシャチーナ当りの収穫は90～150プードと、ヴォログダからはライ麦は平年以上、ヴィャトカからはライ麦、大麦は豊作、オート麦は平年以上と伝えられたように、⁽¹¹⁾地方からの報告は概ね良好な収穫を伝えていた。⁽¹²⁾このような収穫の実現のために多くの労働者が動員された。8月11日のペトログラード・ソヴィエト会議でジノヴィエフは次のように語った。「時は待たない、収穫を実現し、クラークに急いで穀物を隠匿させないように全力を尽くすことが必要である。今や穀物がないと泣き言を言うときではなく、この穀物を手に入れるよう力を貸すことが必要である。……食糧問題とチェコ戦線が当面の基本的で最も重要な問題である」⁽¹³⁾。このような動員のために積極的に労働組合が利用されるようになった。8月11日公表のアピールの中では、各労働組合、各工場委員会に刈入れ部隊の創出と農民への援助を訴えた。⁽¹⁴⁾

しかし都市労働者を部隊に登録させる最大の刺戟は8月3日布告に盛られた新しい規定であった。これにより、大労働組合連合、工場委員会連合、郡、市ソヴィエト（郷が抜けていることに注意）に、固定価格による穀物の獲得またはクラークからの没収の目的で食糧部隊を編成する権限が与えられ、部隊は当該消費県の県食糧委に登録され、調達地区の食糧委の指示と統制の下で調達を行い、調達した穀物の半分は部隊を派遣した県に、残り半分を調達した現地の食糧委の管轄に残すとされた。⁽¹⁵⁾この規定の後段は労働者への「穀物買付権」と理解された。先の8月11日のソヴィエト会議でジノヴィエフは次のように演説した。この布告は「労働者組織に一定の制限と一定の統制の下で独立買付権を与えることである。……簡単に言えばこの方

策は次のようなことである。各大労働者組織、各々の大工場もしかるべき食糧部隊を徴募して、それを我が食糧参事会に登録し、しかるべき命令書を受け取り、穀物買付のために穀物地方に派遣することができる。そこで現地のソヴィエト機関の援助に依拠し、穀物を徴収し、半分を現地に残し半分を運んでくる」。ここで彼は半分の現地に残す不満に対して、配給券で穀物を受け取る労働者や徴収を支援する現地住民のために必要であるとの論拠で対応した。そして彼の言葉によれば、「これが一定の統制と登録が行われるための重大な保証」であった。⁽¹⁶⁾

このような解釈に付随する現地での混乱は後に触れるとして、食糧部隊に関する最も重要な改革は、新たに設置された労働者組織＝軍事食糧局が制度的に食糧部隊の統轄に乗り出したことであった。

モスクワでは5月27日布告に準じて、モスクワ・ソヴィエト下の「食糧徴発部隊編成に関する特別委員会」と、ソヴィエト食糧部の下で国民経済会議議長により組織された食糧委員会（コミッシヤ）の統轄の下で部隊の組織化が行われていた。⁽¹⁷⁾ また7月2日にモスクワ・ソヴィエト食糧部幹部会員 M. リイクノーフの名前で出された指令によれば、各生産ソユーズは7月7日までに最も当てにできる3人以上の従業員から食糧部隊を組織し、食糧委員会の管轄下で活動するとされた。⁽¹⁸⁾ このような中で部隊を労働者組織自身が編成し統轄しようとする当然の要求が労働組合から生まれ、軍事食糧局 Военпродбюро が設置された。

6月27日に、モスクワとその近郊労働者の食糧業務のためにモスクワ労働組合臨時評議会により M. M. コステローフスカヤら5人のメンバーからなる「統制軍事食糧局」が選抜された。しかし食糧業務がモスクワ県を超えて展開するに従い、7月27日に軍事食糧局が全国組織として全ロシア労働組合中央評議会（初めはモスクワ労働組合評議会）の下に組織され、モスクワの各食糧組織もモスクワ・ソヴィエトの指令により軍事食糧局に統合されるようになった。⁽¹⁹⁾

8月3日の労働者組織による穀物調達に関する布告では軍事食糧局＝労働組合の役割はまだ明示されなかったが、同布告を受け、食糧人民委員部との合意でモスクワ、全ロシア労働組合評議会が作成し、ツェルバの署名を付けた8月24日付け臨時指令では、部隊編成に関して軍事食糧局の指導的役割は明確であった。同指令によれば、部隊の編成（25人以上の労働者と貧農から構成）と派遣は軍事食糧局の指導の下で州、県、首都の労働組合連合が行い、それがない地方では郡、市ソヴィエトが行うとされた。生産県の郡で活動する部隊は現地では、食糧人民委員部または県食糧委の代表と軍事食糧局の代表の両方の指揮下に入った。部隊は生産県の食糧委の指定する郷、地区でのみ活動が認められ、部隊の編成と派遣は軍事食糧局が、活動は食糧人民委員部が統制権を持つと同指令で定められた。⁽²¹⁾ そして派遣された部隊を指揮するため、県、郡食糧委から2人と食糧部隊の1人の代表からなり、軍事食糧局の指導の下で活動する県、郡労働者局が設置された。⁽²²⁾

「軍事食糧局の準備期間であった」と言われた8月中に、労働組合は優れた活動家300人を送り込み、情宣部が創られた。モスクワ労働組合評議会は工業地区のイヴァノヴォ＝ヴォズネ

センスク、コストロマ、キネシマを回り、活動家を集め、工場から提出される名簿の中から、工場委員会は特に推薦される活動家をオルガナイザーまたは軍事専門家に登用し、モスクワ市とその近郊のあらゆる大工場で特別ミーティングが開かれ、情宣グループが各地区を回っていた。また調達のための穀物県の郡を選抜し、現地の状況を視察していた。⁽²³⁾ヴォロネジ、ヴィヤトカ、オリョール、クルスク、ペンザ、ペルミ、リャザン、サマラ、エカチェリンブルグ、カザン、サラトフ、シムビルスク、スモレンスク、ウファー県で経験ある活動家から県、郡局が設置され、そのメンバーの4分の3はコムニストであった。⁽²⁴⁾

大々的カムパニアによって当初は軍事食糧局による部隊の派遣は順調であった。8月29日に最初の刈り取り部隊が送られ、9月初めまでに904人からなる20部隊が同局により派遣され、⁽²⁵⁾その数は同月21日までに93部隊、5502人の労働者にまで達した。労働者はソユーズ会館にある軍事食糧局に登録され、登録者の経験と能力に応じて分別され、一部は市内での商店、倉庫、レストランでの食糧の搜索に、そしてまた調達地区に毎日約250人が徴発食糧部隊の補充として派遣されていた。チェコ戦線へ50人ずつの2部隊も送られた。調達された穀物は布告に準じて、現地に半分が残され、モスクワに送られた穀物はモスクワ・ソヴィエト食糧部が管轄し、⁽²⁶⁾共同食堂に入った。

10月半ばでクルスクには882人、タムボフには2173人、ヴォロネジには858人、ペンザには279人が、このほか全部で6000人を超える100以上の部隊が軍事食糧局を通して派遣された。1149人が送られたオリョール県ではモスクワ労働者を中心に最も順調に活動が展開されたと言われた。18年後半で軍事食糧局を経て部隊を派遣した地域別構成は、ペトログラード県から41.4%、イヴァノヴォ=ヴォズネセンスク工業地区から19.9%、モスクワ県から13.8%で、圧倒的にペトログラード労働者が多く、従って職種別でも圧倒的に金属工、次いで繊維工が多く、コムニスト比は1割程度であった。⁽²⁷⁾

しかし軍事食糧局の活動は、地方組織の混乱、責任ある活動家の不足、現地で布告や指令に無知であったために妨げられ、地方で部隊が十分に活動できない場合があった。地方の県、郡食糧委は部隊の派遣に必ずしも好意的ではなく、部隊を縮小しなければならないこともあった。クルスク県食糧委は労働者部隊の派遣を拒否し、貨幣も、食糧も、認可証も交付せず、総勢172人の7部隊は帰還を余儀なくされる事態も生じた。⁽²⁸⁾

軍事食糧局による部隊の組織化以前に、食糧人民委員部の主導による別の部隊編成系統である食糧軍があったことは既に触れた。⁽²⁹⁾食糧軍も8月布告以後急速に発展する。8月には「我々には食糧徴発部隊が必要である。十分に武装され、一つの偉大な事業に相互に強固に団結した軍事部隊は、飢えた人民を賄うための穀物を提供することができるであろう」と、全ソヴィエトとコミサールに、「現地で食糧徴発部隊の徴募と編成に関する精力的措置」を訴えた。⁽³⁰⁾食糧軍参与 E. A. グールヴィッチによれば、18年後半に食糧軍は目ざましい成果を挙げた。この間、軍の総員は2000人から36000人に急増し、前線にも赴き、あらゆる反革命と闘い、貧農委を組

織し、穀物余剰を汲み出した。ヴィヤトカ県だけで5000人以上の食糧軍兵士が派遣された。⁽³¹⁾しかしこの時期は反革命軍との前線の拡大により赤軍の補充の必要性が増し、これに食糧軍が利用された。10月末には軍事革命評議会のプリカースにより、南部戦線での軍事活動のためクルスク、タムボフ、トゥーラ、オリョール、ヴォロネジ、モスクワ県の食糧軍連隊から兵士1万が選抜され、ヴォロネジ地区に充てられた。食糧軍は次第に補充が困難になり、翌19年1月1日には定員は1万余りにまで減少し、⁽³²⁾徴発部隊としての食糧軍の役割は縮小した。

こうして8月6日布告以後18年末までに、約30万人の労働者が食糧部隊として生産諸県へ穀物調達に赴いた。このうち軍事食糧局から約8000人が、食糧軍として約4万人が。いずれにせよ、軍事食糧局＝労働組合と食糧軍＝食糧人民委員部が統制していた労働者部隊は僅かであった。⁽³³⁾

それでも6月布告による貧農委員会の活動と8月布告による食糧部隊の整備は、穀物調達の増加に一定の役割を果たしたことは否定できない。中央諸県で18年後半で6200万プードの穀物を調達することができた（因に、ツァーリ政府は15年後半に6100万プードを、臨時政府は17年後半に1800万プードを調達した）。⁽³⁴⁾

8月改革で食糧部隊の強化が図られると共に、専売制が徹底された。第5回ソヴィエト大会でシェーフレルは「穀物専売について言うなら、それは飢餓県だけでなく穀物生産地区にもなければならぬ」と、またツェルーパーは同大会の結語で「消費諸県のみならず生産諸県での、穀物、その他の食糧生産物の正しい分配が穀物専売法の基礎である」と述べた。⁽³⁵⁾生産諸県への厳格な穀物専売の導入のために、8月5日付け布告で「強制商品交換」が実施された。本布告は8月2日付けレーニン・テーゼの「播種農民に穀物との交換以外に全く商品を引き渡さない」方針が、⁽³⁶⁾ペンザ、クルスクなどの穀物余剰県に適用された。この骨子は、工業生産物の受取はその総額の85%以上を食糧と原料との交換で行うことを義務づけたことにあった。食糧活動家A.ユーリエフによれば、食糧生産物の引渡しを拒否した場合には、商品の出荷を停止するとの恫喝で農村住民に食糧余剰の引渡しを強制した。⁽³⁷⁾事実、サラトフ、スモレンスク、ヴィテフスクなどの県食糧委は穀物を引き渡さない地域への商品の出荷を停止した。⁽³⁸⁾レーニンは後にこのような専売制度を、「資本主義的商品交換から社会主義的商品交換への漸次的移行の最も重要な手段」と評価するのだが、⁽³⁹⁾「半合法的」農村市場の存在と交換財としての工業商品不足の下での「強制的商品交換」の試みは、モスクワ・ソヴィエト幹部会会議でスヴィージェールスキが、「……期待できるほど商品交換を利用するのは不可能である」と報告したように、⁽⁴⁰⁾調達手段としては定着せず、割当徴発の実施によりそれはプレミア的性格以上を持たなかった。

ようやく専売制の強化による穀物調達の増加に限界があることが認識され、穀物固定価格の引き上げが決定された。8月5～6日のレーニンの覚書に基づき、最高国民経済会議との合意で8月8日にライ麦、小麦などの主要穀物の県別固定価格が食糧人民委員部により公示された。価格は約3倍に引き上げられた。しかし既に穀物市場価格はそれを遙かに超えていた。例えば

ライ麦固定価格はカザン県で1ブード4.7ルーブリから14ルーブリに引き上げられたが、市場価格は7月には110ルーブリに達していた。⁽⁴¹⁾

依然として農民には低い公定価格による厳しい穀物専売を強いる一方で、ポリシェヴィキ政権は益々都市の飢餓が深刻化する中で労働者へは一定の譲歩を強いられた。

8月4日付け闇食糧取締部隊条例と同6日付け全勤労者への訴えにより、一人当たり20フント以下の食糧（焼きパン、油、肉は各々10、2、5フント以下）の運搬が許可された。⁽⁴²⁾特にモスクワとペトログラードの労働者には、9月6日人民委員会議条例により、18年10月1日まで、専ら個人的消費のためとして1.5ブードの穀物搬入が認められた。⁽⁴³⁾これに伴い、後にある著名な食糧活動家が「悪名高きかつぎ屋の布告」⁽⁴⁴⁾と名づけた8月24日付けモスクワ・ソヴィエト幹部会条例で、あらゆる駅での闇取締部隊が解除された。⁽⁴⁵⁾この一連の譲歩は、収穫後の農村市場に大きな混乱を持ち込んだ。9月6日条例はソヴィエト組織による独立調達と穀物自由搬送の廃止を定めたが、モスクワとペトログラードへの特例搬送の認可の下では勿論、効力を持ちえなかった。かつぎ屋が猖獗し、労働者組織による独立調達が増加したことは以下で触れよう。

(1) Правда, 1918, 23 июля.

(2) Правда, 1918, 18 авг

(3) Правда, 1918, 20 авг

(4) Правда, 1918, 27 авг

(5) Северная коммуна, 1918, 2 авг

(6) Переписка, т. 4, с. 242.

(7) 8月6日付け全勤労者への訴えの中では、クラークへの罰則が食糧独裁令より一層強化された。基準量を超えて余剰を持ちながら供出しないクラークと富農を「人民の敵」と認定し、革命裁判所へ送られ10年以上の拘置と財産の没収、村団からの永遠の追放が新たに加えられ、穀物没収の際に武器を持って抵抗すれば、その場で銃殺された(Декреты советской власти, т. 3, с. 179.)。

(8) С — ий (食糧人民委員部参与スヴィージェールスキカ) Известия ВЦИК, 1918, 2 авг

(9) Известия ВЦИК, 1918, 25 авг

(10) Правда, 1918, 4 авг.; Северная коммуна, 1918, 4, 12, 13 авг

(11) Северная коммуна, 1918, 12, 22 авг

(12) 最高国民経済会議が受け取った報告でも、ヴォルガ流域からカザン県までは小麦、オート麦、大麦は豊作、タムボフ県では平年作など、同様な出来高を裏付けている(Северная коммуна, 1918, 13 авг.)。但しドン右岸は平年作で、その上ここでは未収穫のまま、殆ど全ての住民が赤軍に動員されたとの報告がある(Северная коммуна, 1918, 22 авг.)。

(13) Северная коммуна, 1918, 12 авг

(14) Правда, 1918, 11 авг

(15) Декреты советской власти, т. 3, с. 142-43 また食糧部隊編成の権限を大きな労働組合連合、工場委連合に限定したのは、集団的かつぎ屋行為を防ぐ意図があったと思われる。例えば、交通人民委員 В. И. Нерфスキの「布告により、各々の駅、作業場、区域、地区、職工労働者、職員毎に組織される部隊に……穀物調達に赴く権利が与えられる」旨の「軽率な電報」に対し、レーニンは、「これはかつぎ屋

行為の紛れもない組織化である」, 「これら部隊から規律, 意識の高さ, 助成を多く期待することはできない」と激しく非難した (Ленинский сборник, xviii, с. 172.)。

(16) Северная коммуна, 1918, 13 авг

(17) Правда, 1918, 14 авг

(18) モスクワ食糧部による食糧部隊の編成に関する7月2日付け指令は, 次のような内容。「労働者または職員の生産ソユーズは7月7日までに, 3人以上で食糧部隊を組織する(1万人以上のソユーズでは5人以上で)。部隊の人数についてソユーズはモスクワ市食糧委 С. ペロルソッフとソヴィエト食糧部幹部会 М. リクノーフに通知し, これら部隊は食糧委の管轄下に入る。召集後部隊活動家は市食糧委の会計で賄われ, 部隊の信頼性の責任はソユーズが持つ (Изв. Наркомпрод, 1918, № 12/13, с. 31.)」。

(19) Стрижков Ю. К. Указ. соч., с. 113.; Правда, 1918, 14 авг

(20) Изв. Наркомпрод, 1918, № 18/19, с. 37 本指令作成に関して, 「労働者組織に買付権を与えた新布告」を勘案して詳細な指令を作成していると報じられた (Правда, 1918, 14 авг.)。

(21) Систем. сборник, кн. 1, с. 222-23. これら部隊の義務として, 穀物の調達だけでなく, 地方食糧組織の要請により穀物の収穫と没収が含まれた。

(22) Гимпельсон Е. Г. Рабочий класс в управлении, с. 321.; Бабурин Д. С. Указ. статья, с. 353.

(23) Правда, 1918, 14 авг.; Известия ВЦИК, 1918, 16 авг

(24) Давыдов М. И. Указ. соч., с. 102. 重要な穀物県タムボフではこの時まで, 現地の部隊だけで徴発が行われていた (Изв. Наркомпрод, 1918, № 18/19, с. 46.)。

(25) Правда, 1918, 12 сент

(26) Костеловская М. Правда, 1918, 26 сент.; Дин В. Известия ВЦИК, 1918, 27 сент

(27) История советского крестьянства, т. 1, с. 71.; Стрижков Ю. К. Указ. соч., с. 117

(28) Дин В. Правда, 1918, 22 окт.; Костеловская М. Правда, 1918, 26 сент

(29) 16年秋の調達カムパニアには帝国政府の農業省の特別軍事組織＝「穀物軍」が導入された (Федоров Л. Изв. Наркомпрод, 1918, № 4/5, с. 2.)。ポリシェヴィキはこのような穀物収奪軍さえ帝国政府から受け継いだ。

(30) Известия ВЦИК, 1918, 21 авг

(31) Известия ВЦИК, 1918, 31 дек. 食糧軍の総員に関しては8月1日の1万1200人から18年11月29日の4万1160人に増加したとの別の数字もある (Стрижков Ю. К. Указ. соч., с. 136.)。18年10月末の食糧軍部隊の配置については, タムボフ県4816人, ヴィヤトカ県4174, クルスク県4069, オリョール県3777, ヴォロネジ県2399人, その他で圧倒的に中央黒土地帯に集中していた (Бабурин Д. С. Указ. статья, с. 350.)。

(32) Бабурин Д. С. Указ. статья, с. 352.

(33) 食糧軍, 軍事食糧局派遣の部隊の人数に関しては, 各研究者は様々な数字を挙げている。この理由として, 先ず当時の情報が混乱しており, 更に実際に企業派遣の部隊とこれら部隊とを判然と区別することは事実上不可能である。従って, これら人数の精確化はソ連史家 В. М. Селунскаяが指摘するような意味を持たない (Селунская В. М. Борьба рабочего класса за социалистическую революцию в деревне в исторической литературе 60-70-х годов. — Великий октябрь. М., 1978, с. 168-72.) 要は, 全体として労働者部隊が中央集権的に統轄されていなかったことが確認されれば充分である。

(34) Дмитренко В. П. Указ. соч., с. 111 19年1月17日の会議でレーニンは, 18年前半の穀物調達量2800万ブードに対し, 後半は2倍半の6700万ブードが調達されたとして, 食糧独裁の「巨大な成果」を賞賛した (Ленин В. И. Полн. Собр. соч., т. 37, с. 419.)。

(35) Пятый съезд советов, с. 149, 153

- (36) Ленин В. И. Полн Собр. соч., т. 37, с. 32.
- (37) Изв. Наркомпрода, 1918, № 11, с. 17
- (38) Фрумкин М. Изв. Наркомпрода, 1919, № 13/16, с. 6.
- (39) Ленин В. И. Полн Собр. соч., т. 36, с. 430.
- (40) Изв. Наркомпрода, 1919, № 1/2, с. 6.
- (41) Известия ВЦИК, 1918, 8 авг.; Изв. Наркомпрода, 1918, № 16/17, с. 28.
- (42) Декреты советской власти, т. 3, с. 170-72, 179. 食糧20フントの自由搬送は、投機人とかつぎ屋が大量に訪れていたプスコフ県の執行委員会から出された18年3月12日付け指令で既に認められ、5月にはベトログラード食糧参事会も同様な措置を採った(Известия петр. совета, 1918, 19 марта, 4 мая.)。
- (43) СУ, 1918, № 64, ст. 707
- (44) Орлов Н. Изв. Наркомпрода, 1919, № 1/2, с. 7
- (45) Декреты советской власти, т. 3, с. 292-95; Известия ВЦИК, 1918, 28 авг. ソヴィエト幹部会条例を補足し、ここで同幹部会は個人的消費のための特惠搬入は各家族員一人当り1.5 プードの計算で行うと指令した。従って、この指令に基づけば1.5 プードに家族数を乗じた穀物量の搬入が認められたことになる。また同幹部会はモスクワ鉄道管区内の闇食糧取締部隊の即座の廃止を指令したが、大衆はそれ以外の地域でも取締部隊を廃止すべきと解釈していたため(条例では鉄道駅と郊外駅で全取締部隊を解除すると規定していたが)、クルスクから伝えられるように、大いに不満を漏らした(Изв. Наркомпрода, 1918, № 18/19, с. 27.)。この問題については後述。

(次号に続く)